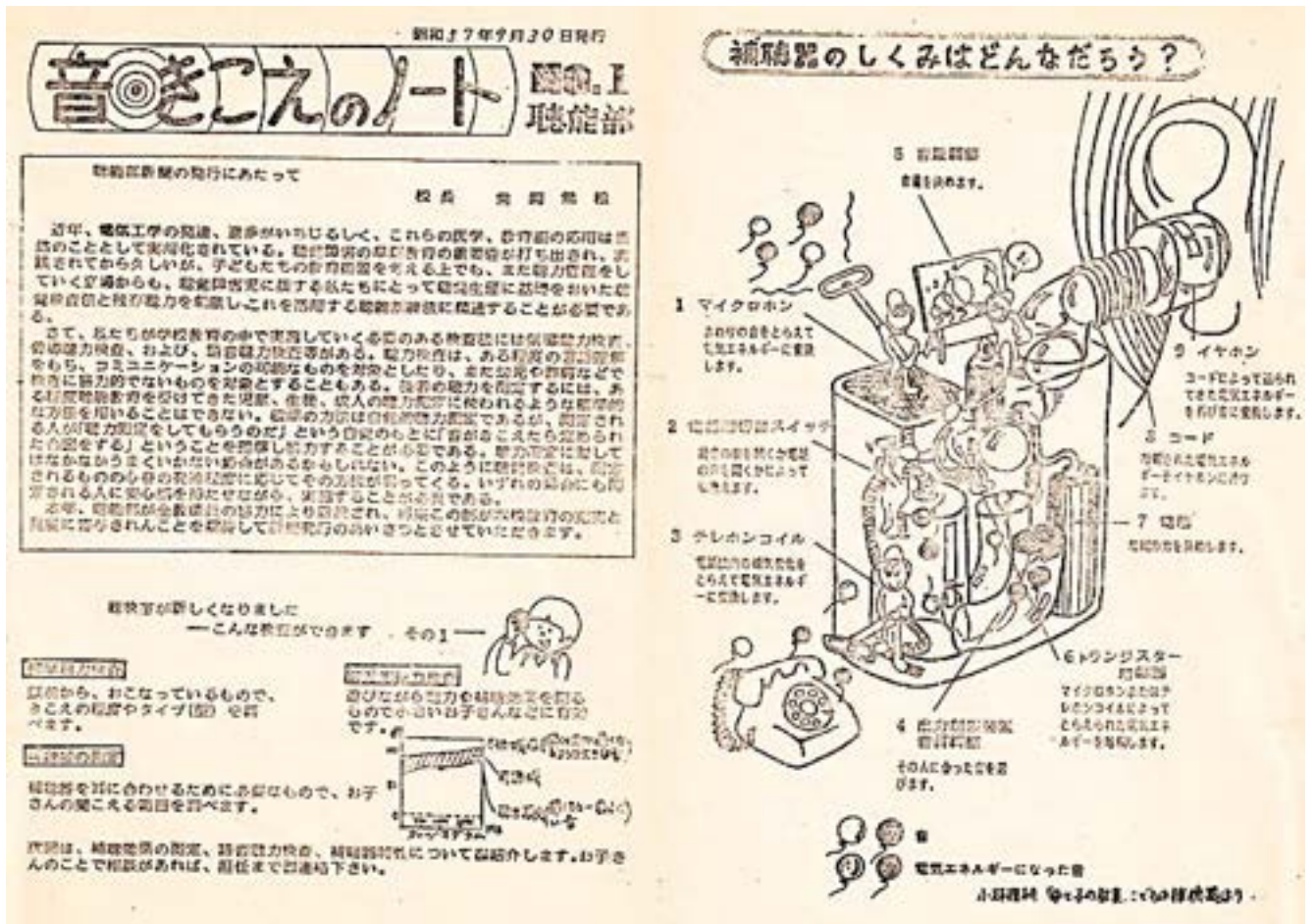


## ありがとうございます！ 発行400号記念号！

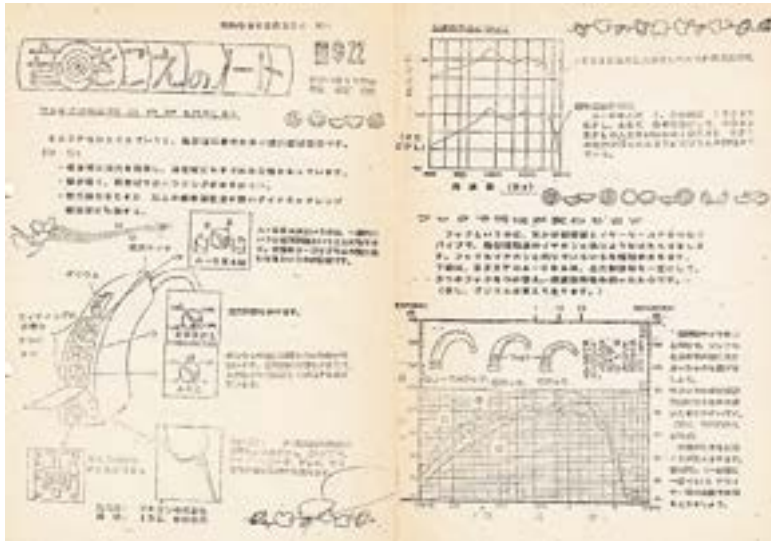
2023年10月号で「音・きこえのノート」は発行400号を迎えました。第1号は、(旧)聴力測定室が新しくなった、昭和57年9月30日に発行されています。「音・きこえのノート」のロゴは早期教育を立ち上げキュードスピーチの導入を体系づけられた先生が「中央の雫から水紋が広がっていくように、さまざまな影響を広げていけるように」との願いを込めて描かれ、当時から変わらず今も使用しています。当時は主に、補聴器や聴能関係の内容が多かったのですが、今はバラエティに富んできて、研修報告、各学部の授業や行事の報告、福祉などの内容をお伝えしています。今回は「音・きこえのノート」をふり返し、紹介いたします。



### 【第1号 (S57.9.30)】

記念すべき第1・2号では、新しくなった聴力測定室でできることを紹介しています。当時は、今の聴力測定室とは違う部屋でした。測定の内容は「標準聴力測定」「補聴効果の測定」「語音聴力検査」「補聴器特性検査」など、今と測定内容にほぼ変わりはありません。

当時の校長である常岡常松校長は聴能部新聞の発行にあたって「聴覚検査は、測定されるものの心身発達に応じてその方法が異なってくる。いずれの場合にも測定される人に安心感を持たせながら、実施することが必要である」と書いています。これからもこの気持ちを忘れず、子どもたちの聴力測定に取り組んでいきたいです。

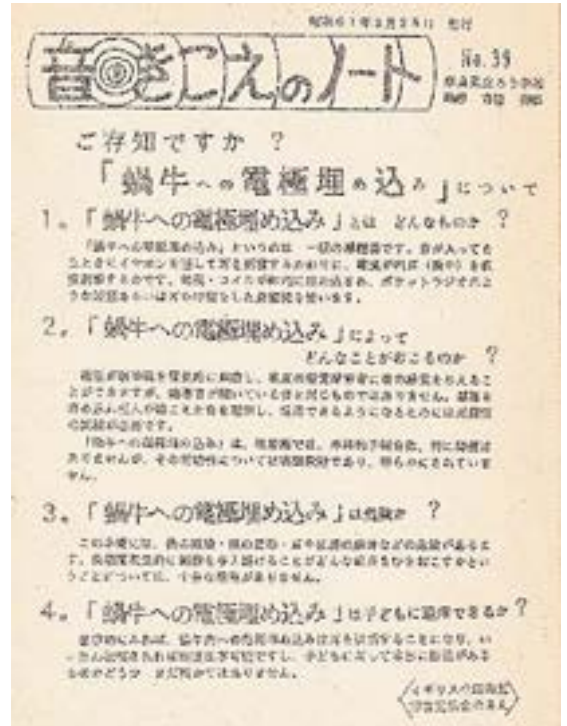


←【第22号 (S59.6.30)】

現在はデジタル補聴器が主流ですが、以前はアナログ補聴器しかありませんでした。かつては補聴器本体に付属されている3つのネジを回したり、フックを付け替えたりして調整をしていたようです。

【第39号 (S61.2.28)】➡

37年前に初めて書かれた人工内耳についての記事です。今となっては装用する人が増えた人工内耳ですが、当時はまだ「人工内耳」という言葉はなく、「人工らせん器」「人工蝸牛」と訳されていました。この記事では「蝸牛への電極埋め込み」と明記され、「一種の補聴器です。…電流が内耳（蝸牛）を直接刺激する」と説明されています。症例も少なく、まだまだ分からないことの方が多かったようです。参考資料) 加我君孝: わが国の人工内耳手術の歴史. Otol Jpn 28(5): 643-648. 2018



↑【第63号 (S63.4.30)】

今、使用している聴力測定室は、昭和63年4月に完成されました。「聴能部」ができて7年目だそうです。聴力測定室に入っすぐの部屋を「準備室」と言っていました。(今は机と椅子を置き、相談できる空間としても活用しています。)

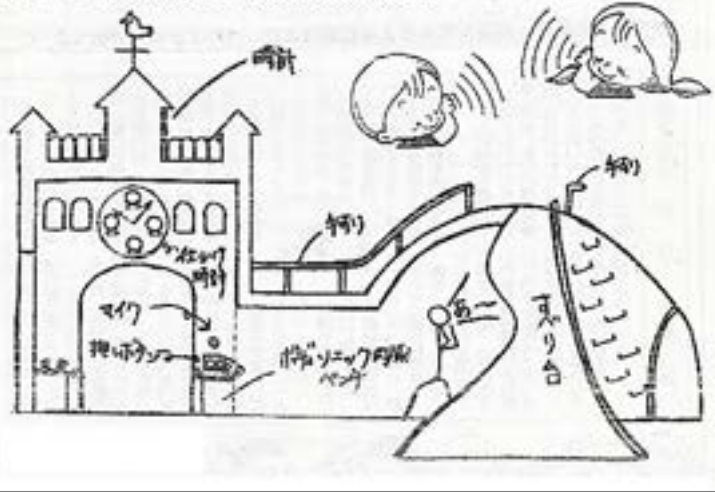
【第157号 (1996.10.31)】➡

面白い記事を発見しました。「補聴器残酷物語」です。その3は「動物編」になります。みなさんもこのようなことがないよう、気をつけてくださいね。



ドームの内部は、反響がよく自分の声がよく響くようになっています。本来こぼの聞き取りという点からいうと、反響は妨げになるものなのですが、ここでは、そういう聞き取りの訓練ではなく、子供によって感じ方はいろいろだと思いますが、場所によっては、自分の声が大きく聞こえたり、エコーがかかったり、反響でぼやけて聞こえたりすることを体験してほしいものです。実際、子供の反応は、「うるさい。」「おおきい。」といったところでした。表現の仕方はいろいろですが、反響が大きい場所というのは特別などころにいかないといものですから、普段の聞こえとひと味違った聞こえを体験してほしいものです。

休み時間になると、子供達が集まってきて、ベンチに座ってボタンを押したり、声を出したり、築山を登ったり、滑り台で滑ったり、思い思いの楽しみ方をしています。滑り台で滑りすぎて少々転んでも平気です。また次々と楽しい遊びに元気に換っていきます。子供達のそういう姿や笑顔を見て、野外で元気いっぱい遊ぶ「あそび場」の大切さを再認識しました。



【第182号 (1999.2.28)】➡

当時、集団補聴システムの種類は大きく分けて、①磁気誘導ループ方式、②FM電波方式、③赤外線方式がありました(第172号 1998.3.17より)。この年、本校にどの集団補聴システムを導入するのか、それぞれの長短を踏まえて議論されたそうです。議論の結果、①磁気誘導ループ方式を活用することになったと記事に書いてあります。今はもうこのシステムは使われてはいませんが、教室の床にループ線が設置されていた跡が今も残っています。現在は、2010年代からデジタル補聴システムが主流となってきています。読者のみなさまの中にも、フォナック社の「ロジャー」やオーチコン社の「エデュマイク」、リサウンド社の「マルチマイク」など、使われている児童、生徒さんは多いのではないのでしょうか？  
参考資料) MS & ADインターリスク総研株式会社：令和元年度障害者総合福祉推進事業集団補聴システムの普及実態に関する調査研究報告書：52.令和2年3月

未来へ！～奈良ろう学校のこれから～

今年、奈良県立ろう学校では10月19・20日に「第57回 全日本聾教育研究大会(奈良大会)」が開催されます。日本各地の聾学校の教職員が奈良ろう学校に来校され、授業を見学したり、参観したり、レポート発表をしたりします。奈良ろう学校、91年の歴史の中でも大きな行事の1つです。  
大会主題は「ゆたかな知恵を育むろう教育」です。子どもたちの知識を「ゆたかな知恵」に変え、これからの時代を生き抜く子どもたちを育てるろう教育の在り方を追求したいという思いと、我々教員がろう教育を継承・発展させていく知恵を参加された先生たちの知識と経験から学び合いたいという思いを込めてこの主題に設定されました。(開催要項より)  
この数年間、各学部の研究テーマに沿って授業研究を重ね、また学部を越えて研究報告を重ねてきました。教職員一丸となって向かっていきたいです。当日の様子については次号以降の「音・きこえのノート」で報告いたします。

■最後に

これまでの「音・きこえのノート」を振り返ると、これまでの先輩教職員が積み重ねてくださった歴史の重みを感じました。さらなる発展に向けて、志を新たに、知識と技能を磨いていきたいです。これからも「音・きこえのノート」をよろしくお願ひします。  
文責 (山田)

◀【第162号 (1997.4.30)】

「ひびきの広場」は「ひびきの塔」と「ひびきの丘」で構成されています。地域特性、個性を考えた学校づくりの一貫として実施された「ship21(スクール・イメージアップ21)」奈良県の事業によってつくられることになりました。「ひびきの塔」は、西洋風のお城をイメージした建物で、内部にはスイッチを押すと音と振動を感じられるベンチがあります。今も変わらず、子どもたちは「ひびきの広場」が大好きで、昼休みには鬼ごっこで遊ぶ子どもたちでいっぱいです。また「ひびきの塔」の内部は平成29年度の高部卒業記念に、四季をイメージして動物の絵が描かれました。今年の8月にはキレイに色を塗り直してもらいました。ぜひ、来校の際は「ひびきの広場」に足を運んでいただき、振動を感じるベンチに座ってみてください。

音きこえのノート NO.182 1999.2.28  
ひびきのろう学校・聴覚部

小学部に集団補聴器がはいります

ずっと小学部に集団補聴システムが設置されることになりました。一度に全ての教室というにはならず、今年度については1教室に設置となりました。本部の2階部分から設置していく予定です。引き続き残りの教室への設置も早業完成してもらうように努めていきたいと思ひます。

さて具体的な集団補聴システムの内容ですが、「音・きこえのノート」No.172で詳しく解説していますが、現在ろう学校で使われている集団補聴システムの種類は大きく次の3つに分けられます。

- ①磁気誘導ループ方式
- ②FM電波方式
- ③赤外線方式

どの集団補聴システムも一長一短があり、どの集団補聴器を導入するかは議論を重ねてきましたが、受話器やコードを巻く必要がなくなり、受話器を切り替えるだけでよいという簡便性、聴覚部や図書部に導入されているものと何システムでも接続性が保たれる、ということから磁気誘導ループ方式を導入することにしました。また、かつてから設置されているループ線(廊下の補聴器の共通線)が定位置に設置(中に聴覚部の仕方が落ちる)ということに反しては、今回のシステムにイコライザーを別込み、あらかじめ聴覚部の入力を定めることにより、本来必要とされる補聴器の特性に近づけたいと考えています。しかし、本校のように様々なメーカーの補聴器が設置している場合、補聴器の機種によってループ接続がうまくいかず、どの補聴器にもぴったりと合わせられないというわけではなく、中立的なところに合わせざるを得ないのですが、多くの補聴器の聴覚部の出力不足がある可能性があるのであると考えています。

# 近畿教育オーディオロジー研究協議会が開催されました。

4年ぶりにコロナ前と同じ、会場に集約する形での開催となりました。8月17日(木)・18日(金)と2日間に分けて行われ、1日目には、福島先生・阪本先生のご講演をきくことができました。講演の内容をいくつかご紹介いたします。

(午前)

講師：福島 朗博 先生 (社会福祉法人十神 やすぎこども園 園長)

演題：「聴覚障がい教育において伝えたいこと～聞こえない子どもが自分らしく生きるために～」

## 自分らしく主体的に生きる力

「生きる力・自分らしさ」は、【日本語力・学力】【社会力】【人間力】【非認知能力】など、様々な力が相互に結びつきあって形成されていきます。その力の根底にあるのは、自分自身を肯定し、大事にしようとする力であり、その力が様々な事に意欲的に取り組むもう一つのことにつながっていくというお話がありました。「あなたを認めてるよ、見守っているよ、大丈夫」という気持ちを言葉で伝え、子ども達が安心して様々なことに挑戦していくことができる環境をつくっていくことの大切さを改めて感じました。

## 学童期の課題である、話し言葉と書き言葉について

一次的言葉  
話し言葉・生活言語



二次的言葉  
話し言葉・生活言語  
書き言葉・学習言語

学童期になると、具体的な事象から抽象的な思考・抽象的な概念の形成をする時期になります。

言語活動には、発達段階があり、その段階での関わりを丁寧に積み重ねていくことで、次の段階に移行しやすくなります。特に、学習言語を身につけるには、その基盤となる生活言語を充実させ、言葉のネットワークを広げていくことが大切です。

例えば「けが」という言葉(経験)からどれだけ言葉を連想できるでしょうか？よく、太ったネットワーク(連想できる言葉が多い)・痩せたネットワーク(連想できる言葉が少なく)と表現されることがあるように、生活言語を充実させるためには、生活の中で、関わる大人がどれだけ意味のあるやりとりをし、ネットワークを太らせていけるかが大事になってきます。乳幼児期からの「いま、ここで」展開される事象や感情を丁寧に言語化し、子どもと共有していくことが、その先の学童期へつながっていきます。

(午後)

講師：阪本 浩一 先生 (大阪公立大学大学院 耳鼻咽喉病態学 准教授)

演題：「聞き取り困難症・聴覚情報処理障害の臨床」

## APD (Auditory Processing Disorder 聴覚情報処理障害)

聞こえているのに、聞き取れない。聞き間違いが多い。などの症状を示すことばとされています。現在のこの状態は「聞き取り困難症」とも言われています。普段は聞こえるけど、うるさい環境や、複数人数になると、聞き取りにくさがあります。

APD以外にも、聞きとりにくさにつながる症例もあります。

- ・軽度難聴 ・片側難聴
- ・機能性難聴(聞こえているのに、聴力測定では難聴を示す。)
- ・Auditory Neuropathy(ANオーディトリー・ニューロパシー)…聴力測定では、低音難聴を示す。
- ・Hidden hearing loss(隠れ難聴)…騒音爆音下の蝸牛シナプス障害による。

## APD 支援の例

教室でみんなが話していると、友達の声が聞こえづらいため、病院を受診。

APDと診断

デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」を使用することで、まわりの雑音を軽減して音を伝える。

学校で聞き間違いが減った例もあります。

APD(聴覚情報処理障害)は、最近メディアで話題に挙がるが増え、社会での認知度があがってきましたが、まだまだ知らない人も多いのが現状です。認知されていなければ、まわりからの理解も得にくく、支援が受けづらい場合があります。今回の音きこえのノートが、APDを知るきっかけになると幸いです。また、「きこえ自体の治療法はなくても、工夫次第で聞きとりに困らない状況や環境を増やしていくことができる」という阪本先生の言葉にもあるように、子ども1人1人に合わせた適切な支援を考え、提供していけるよう、医療と教育が連携しながら、日々取り組んでいきたいです。(文責：熊倉)

お知らせ【販売店「ブルーム」でのオーバーホール(分解掃除)について】

オーバーホール(分解掃除)はメーカーでの対応になるため一側5000円が必要です。メーカーで修理費が必要と判断された場合、さらに修理費が必要になります。